

ロックとヒュームにおける人格同一性の問題

八 田 善 穂

ロックは『人間知性論』第2巻第27章第9節以下において、またヒュームは『人性論』第1巻第4部第6節において、それぞれ人格同一性の問題を扱っている。以下においてはこれらの内容に即しつつ、この両者における自我の問題を考察したい。

ロックは「人物（人格人）」を、「理知と省察とをもち、自分自身を自分自身と考えることのできる、思考する知能ある存^{もの}有者、違う時間と場所で同じな思考する事^{もの}物^り」とし、単なる生命体としての「人間」と区別する。そして彼はこの「人物」の同一性を「人間」の同一性と区別し、また思考実体（精神実体、非物質的実体）のうちにも求めず、もっぱら意識の同一性のうちに求める。

すなわちロックにおいて「人間」の同一性は基本的には植物や動物の同一性と同じであり、「絶えず換わってゆく物質分子が同じ体制の身体へ継続して生命あるように合一し、これによって同じ連続的生命を共にする²⁾」点に存する。

しかし「人物」の同一性（人格同一性）については、前記の「人物」の特性が、「思考と分離できない、私には思考に本質的と思われる、意識によってだけ³⁾」生ずるものであり、「意識がいつも思考に同伴し、この意識がすべての人をその人が自分と呼ぶものにさせ、これによってその人自身を他のすべての思考する事^{もの}物^りと区別するゆえに、この意識にだけ人物同一性すなわち理知的な

〔注〕

- 1) John Locke “An Essay concerning Human Understanding” ed. by P.H. Nidditch, Oxford 1979 (以下“Essay”と略記する) P.335
大槻春彦訳『人間知性論』(岩波文庫(以下『人間知性論』と略記する) P.312
- 2) “Essay” pp.331—332, 『人間知性論』P.306
- 3) “Essay” P.335, 『人間知性論』P.312

も^のの
 所有者の同じなことは存する⁴⁾」とされる。

また、実体との関係については、「意識が一つの個の実体にだけ結びつけられているか、あるいは、いくつかの実体の継起のうちに連続できるかは、どうでもよい⁵⁾」とされ、さらに、同じ意識が「一つの思考する実体から他の思考する実体へ転移できるとすれば、二つの思考する実体がただ一つの人物を作れる⁶⁾」し、逆に、「同じ意識をもたない同じ非物質の実体がある身体に合一されても同じ人物を作らない⁷⁾」、「自分(ないし自我)は、実体の同一性もしくは差異性という確めることのできないことで決定されず、意識の同一性だけで決定される⁸⁾」とされて、人格同一性の拠り所としては扱われていない。

そこでロックの立場は次の文章に要約される。すなわち、

「ある知能あるも^の所有者がある過去の行動の観念を、この行動について最初もった同じ意識とともに、また、現在のある行動についてもつ意識とともに反復できるかぎり、そのかぎりはその知能あるも^の所有者は同じ人物の自分^のなのである。⁹⁾」

そしてこの点に関するロックの主張は徹底している。たとえば、「もしソクラテスとクイーンバラ現市長とが意識の同一性で一致すれば、二人は同じ人物なのである。〔これに反して、〕目ざめているソクラテスと眠っているソクラテスという同じソクラテスが同じ意識にあずからないとすれば、目ざめているソクラテスと眠っているソクラテスとは同じ人物ではない¹⁰⁾」といわれ、また、「かりにもし二つの別個な〔他に〕伝達できない意識が同じ身体に、一つは絶えず昼間働き、いま一つは夜分働く想定し、他方、同じ意識が間隔を置いて二つの別個な身体に〔交互に〕働く、そう想定することができたとしたら

4) “Essay” p. 335, 『人間知性論』 p. 312

5) “Essay” p. 336, 『人間知性論』 p. 314

6) “Essay” p. 338, 『人間知性論』 p. 318

7) “Essay” p. 339, 『人間知性論』 p. 320

8) “Essay” p. 345, 『人間知性論』 p. 329

9) “Essay” p. 336, 『人間知性論』 p. 314

10) “Essay” p. 342, 『人間知性論』 p. 324

私は問うが、最初の場合、昼の人間と夜の人間は、〔たとえば〕ソクラテスとプラトンのように別個な二人の人物ではなからうか。また、第二の場合には、一人の人間が二つの別個な衣服を着ても同じ人物であるように、二つの別個な身体に一人の人物がいるのではなからうか¹¹⁾』といわれる。さらに極端な例としては、「かりにもしこの小指を切り離して、この意識が小指についてゆき、残りの身体を去れば、明白にこの小指が人物であり、同じ人物であらう。で、そのとき、自分は残りの身体となんの関係もないだろう¹²⁾』とまでいわれる。

また忘失について、ロックは次のような反論を予想する。すなわち、「私が私の生活のある部分の記憶を取りもどせないほどまったく失い、そのため、二度と意識することはおそらくなからう、そう想定しよう。しかも、私は、今は忘れてしまったが、かつては意識したような行動をし、思想をもった、同じ人物なのではないか。¹³⁾」

これに対してロックは、「私」ということばは人間にのみ当てはめられ、「もし同じ人間が違う時に別個な〔他に〕伝達できない意識をもてるとしたら、疑いもなく、同じ人間が違う時に違う人物を作るだろう¹⁴⁾』とする。

このように、ロックにおいては「人間」と「人物」が明確に区別されている。そして、このようにロックが人物同一性を意識のうちにのみ求めようとした意図は、彼が人物にのみ行為の責任を求めようとしたところにある。すなわち、彼は「眠っているソクラテスが考えて、目ざめているソクラテスがけっして意識しなかったこと、そうしたことのゆえに、目ざめているソクラテスを罰することは、双生児の外貌がひじょうによく似ていて、二人を区別できないほどだからといって、その一人がなにも知らない兄弟のしたことのゆえに罰せられるのと同じように、正しくないだろう¹⁵⁾』とする。

11) “Essay” P. 344, 『人間知性論』P. 328

12) “Essay” P. 341, 『人間知性論』P. 323

13) “Essay” P. 342, 『人間知性論』P. 325

14) 同上

15) 同上, 『人間知性論』P. 324

しかし、一方で若干のあいまいさが残っていることも事実である。たとえば夢遊病者が目覚めている状態と眠っている状態、あるいは人が酒に酔った状態とさめた状態とでは、同じ人物といえるだろうか。もしそうでないなら、「なぜ酔ったときに犯した事実を後になってまったく意識しないにかかわらず、この事実のために罰せられるのか¹⁶⁾」という疑問がある。これに対してロックは、人間の法は「真実なものといつわりをものとを絶対確実には区別できず、したがって、酔ったり眠ったりしたとき知らないことは弁明と認められない¹⁷⁾」「酔漢はおそらく自分のしたことを意識しないが、それにもかかわらず、人間の法廷が酔漢を罰するのは正しい。なぜなら、事実は酔漢に不利なように証明されるが、意識の欠如は酔漢に有利なように証明されることができないからである¹⁸⁾」とする。そしてそれに続いて、「あらゆる心の秘密が明かるみにさらけ出される最後の審判の日には、だれも自分のなにも知らないことに責任を負わされず、良心が責めるか赦すかで最後の審判を受けるだろう¹⁹⁾」とする。

この点は、先に見たロックの意図からすれば、不明瞭というべきであろう。

また、ある行動に関する意識が一つの思考実体から他の思考実体へ移るかどうかという点についても、「神は……賞罰を伴うような意識のある被造物から他の被造物へ転移し〔自分の行なわなかったことの意識で罰せられる不幸におちいらせるような無慈悲なことはなし〕たまわらないだろう²⁰⁾」とするが、これも同様に不明瞭といわざるをえない。

Mackie はこの点に関して次のような批判を加えている。すなわち、神が上述のような意識の転移を起させないであろうという際には、人物同一性を構成するものとして、意識の転移から防止される必要のある、何か別のあるものが想定されており、一方、ロックの主張する通りに、意識のみが人物同一性を構

16) “Essay” P. 343, 『人間知性論』 P. 327

17) “Essay” P. 344, 『人間知性論』 P. 327

18) 同上, 『人間知性論』 P. 328

19) 同上

20) “Essay” P. 338, 『人間知性論』 P. 318

成するのであれば、神の慈愛が祈願されなければならないような誤りも不正もありえないであろう。ある人が意識する行為は当然彼のものであり、これらの行為が他の人間あるいは他の実体によってなされたものであるかどうかは問題にならない、というものである²¹⁾。

この意識の転移の問題に関連して、ロックは次のような例を挙げている。

「ある王公の靈魂がその王公の過去の生活の意識を伴いながら、靴直しの身体に、靴直し自身の靈魂が去るやいなや入り込み、宿ったとしよう。だれしもこの男は王公と同じ人物で、王公の行動だけに責任をもつと、そうみるだろう。が、〔王公と〕同じ人間だと言う者がいるだろうか。身体もまた人間を作るのに加わるのであって、私の臆測ではすべての人にとって、この場合身体が人間を決定するだろう。その場合、靈魂は、過去の行動について王公のすべての思想を伴っても、〔靴直しより〕他の人間を作らないだろう。〔王公の意識をもち、王公だとみずから思っている〕その人は、その人自身のほかのすべての人にとって同じ靴直しだろう。²²⁾」

Mackie は、この例についても、次のように批判している。すなわち、ここで転移したのは王公の「意識」ではなく、「意識を伴った靈魂」とされている。しかし、この例がロックの理論の正当性を真に試すためのものであるならば、「靈魂」を除外して、王公の過去の生活の意識のみが、靴直しの身体に宿る靈魂のうちに、靴直し自身の記憶が去るとともに、入り込む(とするならば)というべきであろう、というものである²³⁾。

このように、いくつかの不明瞭な点があるにしても、ロックの意図は、前にも述べた通り、「人間」と「人物」を峻別し、行為の責任をもっぱら後者に求める点にある。そしてこの点に関する限り、われわれはその意義を認めることもできよう。

しかし、先に挙げた小指の例にも見られる通り、人物同一性の基準が意識に

21) J. L. Mackie "Problems from Locke" Oxford 1976. pp.184—185

22) "Essay" P. 340, 『人間知性論』 P. 321

23) Mackie 前掲書 P. 185

のみ求められ、身体との関連が完全に除外されている点については、ロックの説があまりに極端であり、このことがかえって不十分な点を残す結果になっているというべきであろう²⁴⁾。

Penelhum は、「人物は依然として人間であり」、たとえば犯罪に関する責任が問われる際には、その犯罪に関する記憶だけでなく、「その犯罪に際して身体的に居合せること」が、同時に必要なことであるとする²⁵⁾。これに対してロックの主張は、身体的に居合わせたのみで、そのことに関する意識がないならば、道徳的責任を問うことはできないということであろうが、もしこのように身体的条件を前提とするのであれば、そのことがもっと明瞭な形で述べられるべきであったろう。

Mackie はこの点に関して、身体の基準は正しい記憶と誤った記憶を区別するためには有効であるとしながらも、問題はこの区別ではなく、何が人物同一性を構成するかであるとして、身体の基準を人物同一性の基準の中に算入することには反対している²⁶⁾。

しかし、記憶が問題とされる際には、当然その内容の真偽まで問われるべきである。それゆえ、たとえ真偽の判定の基準としてであっても、身体の基準は無視されるべきではなかろう。そしてもしロックが、人物同一性の条件として身体の同一性をも考慮に入れていたならば、先に挙げた酔漢の場合や意識の転移の場合に見られたような、不明瞭な点は残らずに済んだようにも思われる。

さらに、もしある人物が為したことに関して、そこに居合わせず、そのことと全く無関係な別の人が記憶しているというならば、それは単なる誤った主張であるか、または記憶ちがいにすぎない。そこで、**Penelhum** によれば、ある人物があることに関して記憶しているということは、実は、「その人物以外のだれもそのことを記憶していない」という意味を含むことになる。しかしこ

24) cf. Terence Penelhum 'Personal Identity' in *Encyclopedia of Philosophy*, ed. by P. Edwards, Macmillan, Vol. 6

25) 同上 p.97

26) Mackie 前掲書 pp.185—186

のとき、記憶の概念は逆に人物同一性を前提とすることになり、定義が循環してしまうので、この点からも、記憶のみを人物同一性の基準とすることは誤りであるとされる²⁷⁾。

要するに、ロックの説く「人物」は、Allison が指摘する通り、具体的・現実的な人間の一つの側面にすぎず、あくまでも抽象されたものであるというべきであろう²⁸⁾。

ロックが、人間は「自分自身の存有の明晰な知覚をもつ²⁹⁾」とするのに対しヒュームは、「自我観念は全くない³⁰⁾」とする。それは、「もし自我観念を起す何らかの印象があるとすれば、この印象は、人間の全生涯を通じて変動なく、同じであり続けなければならない³¹⁾」が、実はこのような「恒常的且つ無変動な印象はない³²⁾」からである。そこで、「これらの印象のどれからも、又その他のどんな印象からも、自我観念が由来することはできない³³⁾」とされる。

ヒュームによれば、「人間とは、〔実のところ〕想いも及ばない迅さで次々に継続する……様々な知覚の束ないし集合³⁴⁾」にすぎず、心とは「一種の劇場³⁵⁾」であり、「ある一つの時における単純性も、異なる時における同一性も心に

27) Penelhum 前掲論文 P. 98

28) Henry E. Allison 'Locke's Theory of Personal Identity: A Re-examination' in I. C. Tipton (ed.) "Locke on Human Understanding" Oxford Readings in Philosophy 1977 P. 111

29) "Essay" P. 619, 『人間知性論』(四) P. 175

30) David Hume "A Treatise of Human Nature" ed. by L. A. Selby-Bigge and P. H. Nidditch, Second Edition, Oxford 1978 (以下 "Treatise" と略記する) P. 251

大概春彦訳『人性論』(二) 岩波文庫 (以下『人性論』と略記する) P. 101 (但し訳文は適宜改めた)

31) 同上, 『人性論』 pp. 101—102

32) 同上, 『人性論』 P. 102

33) "Treatise" P. 252, 『人性論』 P. 102

34) 同上, 『人性論』 P. 103

35) "Treatise" P. 253, 『人性論』 P. 103

は存しない。³⁶⁾すなわち、「心を組成するものは、継起する知覚だけである³⁷⁾。」

それでは、このように「継起する知覚に同一性を帰し、またわれわれ自身、全生涯を通じて変化も中断もない存在を所有するものであると考える大きな性癖は、一体どうして生じるのであろうか。³⁸⁾」これを解明するためにヒュームは動植物その他の可変的事物に対して、同一性が帰せられる場合を列挙する。

彼はまず、われわれが、「ある仮定された時間変動を通じて、変化もなく、中断もなしに留まるある事物についての判明な観念(idea)(同一性の観念)³⁹⁾」と、「継起的に存在し、緊密な関係によって結合するいくつかの異なる事物についての、同様に判明な観念(idea)(厳密な意味では不同性の観念)⁴⁰⁾」とをしばしば混同することを指摘する。

確かにこの両者を想像する際の心的活動は似通ったものであるが、実は、「この類似が、混乱と間違いの原因であり、われわれに、同一性の観念(notion)を関係ある事物の観念(notion)に代用させてしまうのである。⁴¹⁾」すなわちわれわれは「間違いによってのみ継起に同一性を帰することができるのである。⁴²⁾」

たとえば、部分が互いに隣接し、結合しているある物質の塊を考えると、もし「この物質の塊の全体または任意の部分に、いかなる運動すなわち場所の変化が見られるにせよ、全部分が引続いて無変動且つ無中断であるとすれば、われわれはこの物質塊に完全な同一性を帰属する。⁴³⁾」

ところが、極めて小さな、あるいはわずかな部分が、この塊に対して付加され、あるいは削除された場合にも、多くの場合、われわれはこのことによって同一性が失われたとは考えずに、この塊は同じであるとしてしまう⁴⁴⁾。

36) “Treatise” p. 253, 『人性論』 p. 103

37) 同上, 『人生論』 p. 104

38) 同上

39) 同上

40) 同上

41) “Treatise” P. 254, 『人性論』 P. 105

42) “Treatise” P. 255, 『人性論』 P. 106

43) 同上, 『人性論』 P. 107

44) “Treatise” pp. 255—256, 『人性論』 P. 107

さらに、物体の部分に著しい変化があれば、物体の同一性は破壊されるが、この変化が漸次に、そして気づかれずに起るときには、われわれはやはり同一性が失われたとは考えない⁴⁵⁾。

そしてこのことは、部分相互の関係が、ある共通目的との関連で捉えられるとき、さらに顕著となる。すなわち、「例えば一艘の船は、頻々たる修理によって部分が著しく変化してしまったのちも依然として同じ船と考えられ⁴⁶⁾」、「小さな苗木から鬱蒼たる大樹となったにせよ、樗は依然として樗である。⁴⁷⁾」また、「幼児が成人して時には肥え時には瘠せても、その同一人である点には些かの変化もない。⁴⁸⁾」

以上のような場合に加えて、ヒュームはさらに二つの場合を指摘する。その第一は、われわれが数的同一と種類の同一とを混同する場合である。すなわち、「例えば或る人が、頻繁に中断しては新たに聞える物音を聞くととき、その物音は依然として同じ物音であると言う。けれども明らかに、それらの音響は種類の同一即ち類似を有するだけで、数的に同じ物は、音響を産む原因の他に何物もない。⁴⁹⁾」あるいは、「以前は煉瓦作りであった教会が壊滅して教区民が同じ教会を砂石造りで近代建築風に再建した、ということが言われて、しかも言語の適正を破ったとは考えられない。この場合、形態も材料も同じでなく、二つの建物に共通なものは、両者が教区の住民に対して有する関係だけである。が、これだけで二つの建物を同じと呼称するに足るのである。⁵⁰⁾」

第二は、「事物がその本性に於て可変的且つ非恒常的である時は、他の場合であれば該関係（即ち同一関係）と撞着するほどの急激な変化も許される⁵¹⁾」点である。すなわち、「例えば、河の本性は部分の運動即ち変化に存する。従

45) "Treatise" P. 256, 『人性論』 P. 108

46) "Treatise" P. 257, 『人性論』 P. 109

47) 同上

48) 同上

49) "Treatise" P. 258, 『人性論』 P. 110

50) 同上

51) 同上, 『人性論』 pp. 110—111

って24時間を出ないあいだに部分は全く変更されてしまうが、さりとてこのことは、河が幾時代も続いて同じ河であることを妨害しない。⁵²⁾」

ヒュームは、人間の心に帰せられる同一性についても、以上に見たような種々の場合と同じく、それはあくまで架空の同一性であるとする。彼によれば、「心の構成に参加する一切の別個な知覚はいつも真に別個であって、他の一切の同時的な或は継起的な知覚から異り、区別でき、分離できる。⁵³⁾」ところがこれにもかかわらず、われわれはそれらの知覚が同一性によって結ばれていると考える。そこで問題になるのは、「同一性という関係は、若干の知覚相互を真に結ぶものであるか、或は単に知覚の観念を想像で連合するに過ぎないものであるか⁵⁴⁾」ということである。

ヒュームはこれに対して、「同一性は、心に現われる様々な知覚に真に属して知覚を接合するものでなく、我々が知覚を省るとき想像に於て知覚の観念が接合されるところから知覚に帰属させられる性質に過ぎない⁵⁵⁾」とする。そして、想像において観念を接合できる性質は、類似・接近・因果性の三つの連合関係であり、同一性はこれら三つの関係の或る一つに依存するが、ヒュームが特に取り上げるのはこのうちで類似と因果性の二つである。

まず類似について見ると、「知覚継起のあらゆる変動を通じて、該継起へ関係を付与することに最も貢献できるものは、記憶である。⁵⁶⁾」すなわち、「記憶は単に同一性を発見するのみならず、知覚間に類似関係を産んで、よって以て同一性の産出に貢献する。⁵⁷⁾」

因果性についても同様であり、「知覚の継起が(因果的に)継続し且つ(時間的に)拡がることを識らすものは記憶だけである。⁵⁸⁾」

52) "Treatise" P. 258, 『人性論』P. 111

53) "Treatise" P. 259, 『人性論』P. 112

54) 同上

55) "Treatise" P. 260, 『人性論』P. 112

56) 同上, 『人性論』P. 113

57) "Treatise" P. 261, 『人性論』P. 114

58) 同上

そこで、「記憶は人格同一性の源泉である⁵⁹⁾」ということになる。

以上の如く、ヒュームにおいて、人格同一性とは、われわれが記憶によって、個々の知覚の間に類似性もしくは因果性を見出すところに、そしてそこにのみ生ずるものである。

前述の如く、ロックは動植物や人間の同一性と人物の同一性とを区別したがこれに対してヒュームは、「動植物に於ける同一性と自我ないし人格の同一性とのあいだには非常な近似がある⁶⁰⁾」とし、「人間の心に帰せられる同一性は単に架空の同一性で、草木及び動物体に帰せられる同一性と似寄った種類のものなのである。故に、(動植物の場合と)異なる起源を持つことができず、似寄った対象に就いて働く想像の似寄った作用から生じなければならぬ⁶¹⁾」とする。

Allison はこの点を、「ロックの分析は道徳的責任の限界を定めようとする試みから発生したが、ヒュームのねらいは(自我観念が存在するという)信念の起源を示すことである。⁶²⁾」そして、「ロックが人物の同一性を記憶の継続と等置するのに対し、ヒュームは記憶を架空的信念の根源とする⁶³⁾」と述べている。

それゆえ、ヒュームにおいては、ロックに見られたような、「人間」と「人物」の区別は見られず、むしろ彼の説は、ロックが人物同一性を扱う前の部分(『人間知性論』第2巻第27章第4節—第8節)で扱った問題(草木の同一性、動物の同一性、人間の同一性)を、検討し直す形で展開されている。

すなわち、ロックは、「物質のかたまりと生命体とのこれら二つの場合では同一性が同じ事物に当てはめられない⁶⁴⁾」とし、同一性に種類があることを認めるが、ヒュームは、より厳密に、「無変動且つ無中断に留まる一事物⁶⁵⁾」に

59) "Treatise" p. 261, 『人性論』P. 115

60) "Treatise" P. 253, 『人性論』P. 104

61) "Treatise" P. 259, 『人性論』P. 111

62) Allison 前掲論文 pp. 113—114

63) 同 P. 114

64) "Essay" P. 330, 『人間知性論』P. 304

65) "Treatise" P. 253, 『人性論』P. 104

のみ本来の同一性を認めようとする。ヒュームにおいて、他の場合すなわち動物における同一性は、この本来の同一性からのいわば類推にすぎない。

ところで、人間が「様々な知覚の束ないし集合に過ぎない⁶⁶⁾」というとき、それは、「彼ら自身の知覚の束ないし集合に過ぎない」という意味でなければならず⁶⁷⁾、また、記憶によって知覚の間に類似や因果性が見出されるためにはそれらの知覚は同じ一人の人間の記憶のうちに含まれるものでなければならぬ⁶⁸⁾。

たとえば、Aの後にはいつでもBが生じ、Bの後にはいつでもCが生じるとし、これらに対応する知覚をそれぞれa, b, cとする。そしていま、これらがそれぞれ別な人物の心のうちに生じたとしても、a, b, cの間の因果関係は失われることはないが、このときこれらが一つの心を構成するとはいえない⁶⁹⁾。

Stroudはこの点について、「人がどのようにして、あるいくつかの知覚について、彼自身の心の中における恒常的結合に気付くことによって、それらの知覚が因果的に結合していると考えられるようになるかについての説明は、一つの自我あるいは心の観念を基本的に使用している。一方、人がどのようにして、あるいくつかの知覚について、これらの知覚が因果的に結合していると考えられることによって、それらが一つの心の中に結合していると考えられるかについての説明は、因果性の観念を基本的に使用している。因果性の観念を説明するには人格同一性が使われ、人格同一性の観念を説明するには因果性が使われている。そこで、ヒュームの人間論のうちには、一種の循環があるというべきである。⁷⁰⁾」と指摘している。

すなわち、ヒュームにおいても、知覚ないし記憶自体に関しては、一人の

66) "Treatise" P. 252, 『人性論』P. 103

67) cf. Terence Penelhum 'Hume on Personal Identity' in "Hume" ed. by V. C. Chappel, Macmillan Modern Studies in Philosophy. 1966 P. 219

68) cf. Barry Stroud "Hume" Routledge & Kegan Paul 1977. pp. 124—125

69) 同 P. 125

70) 同 P. 135

物の知覚ないし記憶として扱われていると考えざるをえない。

そこで、ロックとヒュームにおいて、問題の取扱いは上述のようにそれぞれ異なっているながらも、両者は記憶を拠り所とする点において共通しており、この点で、ヒュームの説はロックの説を批判的に継承したものといえよう。

先にもふれた通り、ヒュームにおいてはロックと異なり、「人間」と「人物」の区別は見られない。しかし動植物や自我ないし人格について、たとえ架空的なものであるにせよ、それらに同一性を見出す働きとして、記憶が捉えられている。

そしてこの点に関する限り、ヒュームの説はロックの、「ある人間をその人自身にとってその人自身とさせるものは同じ意識である⁷¹⁾」という説を引きついでいると考えられる。

71) “Essay” P. 336, 『人間知性論』 P. 314